

ドイツサッカーとのつきあい方

大藪正彦

僕が今住んでいる静岡市では、夕方学校のそばを通ると、必ず子供たちがサッカーをしている。引越してきた頃は、この風景を目にして、ああ静岡に来たんだなと思った。僕が十代を過ごした地域では、子供たちにとつてのスポーツと言えば野球だった(ですよ、ふつう)。そんな中、僕がなぜサッカーを始めたのか思い返してみると、「いちばん」ではないけれどもおもしろそう、という気持ちはどこかにあったように思う。もしかしたら、大学でドイツ語を選んだのも同じ理由だったのかもしれない。静岡に生まれ育っていたら、人生が少し変わっていただろうか。

さて、僕がサッカー選手としてではなく、ドイツ語教員としてデビューすることになってから二十年余り日本人とサッカーを取り巻く環境はとて大きく変わった。今ではブンデスリーガで日本人選手がプレーすることもめずらしくない。このことは僕たちドイツ語

教員にも少なからず影響を与えている。

そう、「サッカー人気にあやかって学生をドイツ語に誘い込み……」というやつです。ところが、教員の意に反してサッカーネタが盛り上がりがないことも多い。察するに、学生の方がサッカーに詳しくたりすることに原因があるのだろう。また、最近では、サッカー日本代表の主軸は、ベルギー、オランダ、ポルトガルなど、ドイツ以外のリーグでプレーする選手に移ってきた。僕たちの意識も多様性への対応を迫られている。

それでもブンデスリーガが他の主要リーグより優れている点はいくつも挙げることができる。ドイツ語教員としてサッカーというテーマは避けて通れそうになり。ここで冷静に戦況を分析してみよう。ドイツ語教員はサッカーとどう向き合えばよいのか。以下、四つの領域に分けて考えてみる。

①大会方式や運営組織についての知識。これは少し勉強すれば何とかかなりそうだ。ドイツにおけるサッカーのトップリーグはブンデスリーガ。リーグ戦と並行してカップ戦も行われるが、こちらは連盟の名を冠してDFBポカールと呼ばれる。ヨーロッパでは国の枠

を越えた大会も盛んで、欧州サッカー連盟(U E F A)の主催するチャンピオンズリーグやヨーロッパリーグのことも知っておきたい。

②時事情報。これはサッカー好きの学生の方が詳しいので、あまり勝負を挑まないことをお勧めしたい(特に「クロップのリヴァプールがグアルディオラのシテイを抑えて首位に立った」という情報を聞いて心がざわざわしないような場合には)。どうしても学生に負けたくないという場合は、Kicker のスマホ向けアプリでリアルタイムの情報が入手できる。ご参考まで。

③サッカー用語。おそらくプロのドイツ語教員がもつとも実力を発揮できるのはここだろう。ドイツ語に苦労する選手やファンは多い。サッカー用語は「専門語」の一つであると考えてよい。ここで言う専門語とは、いわゆる専門用語だけを指すのではなく、発音、語彙、文法にわたるその分野の言語の総体(言語体系)のことを言う。へふつうのドイツ語も含めて(サッカー用語)は成り立っている。ドイツ語教員の出番だ。

④伝説(集団的記憶)。サッカーに関する出来事が、社会的な出来事として僕たちの記憶に刻まれることが

ある。日本には「ドーハの悲劇」があるが、ドイツサッカーの歴史はさらに古く、変な言い方だが、「ベルンの奇跡」のように、僕が生まれる前の「記憶」だってある。そう言えば、昨夏のロシアワールドカップで日本代表が時間稼ぎをしたとき、ドイツメディアでは「ヒホンの恥」という文句が躍った(もちろんドイツ語で)。関心のある方はネットで調べてみてください。この辺りも知識(と関心)の問題であると言えそう。

さて、秋から冬にかけて、静岡県では教職員サッカー大会が開催される。地区予選から始まり、ベスト三十二の決勝トーナメントへと続く。これをレクリエーションのようなものと思っではいけない。この人たちは本当に教職員なのか、と僕は毎年(複雑な気持ちで)自分のサッカー人生を振り返ることになる。静岡大学教職員チームの二〇一八年シーズンはというと、なんと決勝まで勝ち進んだ。結果は準優勝。けれど、競争が強調され過ぎるとサッカーが楽しくなくなるのもまた事実。あらためてそう思った。うーん、僕は「いちばん」でなくてもいいかな。(静岡大学教授)